

生涯学習としてのテニス参与の年代間比較

宮本 邦雄¹・磯辺 和正²

1：東海学院大学人間関係学部心理学科，2：子ども発達学科

要 約

本研究では、生涯学習としてのテニス参与に関わる要因が成人前期から高齢期にかけてどのように変化するか横断的調査を行い、若年層（40歳未満）、中年層（40～59歳）、高齢者層（60歳以上）に分け比較検討した。

若年層は、大学での活動の延長線上でテニスへ参与していること、高齢者層は余暇活動としてテニスへ参与していることが示唆された。また高齢者はテニス実践活動のレベルが高く、競技性の低い余暇活動として楽しんでいることが示唆された。

継続要因の分析から、各世代共通して、友人と共にテニスをするのがテニスへの参与を活性化するが、若年層では異性友人の要因が逆にテニス参与を阻害すること、中年層では競技性の低い余暇活動としてのテニス参与が阻害的要因になることが示唆された。

キーワード：テニス、生涯学習、スポーツ参与

問題と目的

高齢化社会において、退職後も健康を維持し充実した生活を送ることが高齢者の生活の質（QOL）を維持する重要な要因である。すなわち、余暇時間を利用した生涯学習に取り組み、メリハリのある生活を続けることが重要であることが報告されてきた。岡本(2004)は、生涯発達心理学の視点にたち、青年後期から高齢期までの各ライフステージにおける、関心を持つ課題、学習したい課題、助言や援助を要する課題を調査し、生活の質とウェルビーイングとの関連を検討した。男女とも、関心のある課題には体力・健康づくりが最も選択されており、学習したい課題、助言や援助を要する課題でも上位に位置していた。そして、生涯学習によってQOLや心理的充足感、人生の意味の意識が向上することが示唆された。

また、運動・スポーツ活動の継続は、高齢者の生活満足度やQOLを向上させる要因となっている(Elavsky, McAuley, Motl, Konopack, Marquez, Hu, Jerome, & Diener, 2005; Guinn, 1999; 石澤・上田・本多, 2010; 石澤, 2004; 太田・仲野・丸山, 2005; 山口・土肥・高見, 1996)。さらに、高齢者の運動実践とQOLとの関連にはセルフ・エフィカシーが関与していることも報告されてきた(前場・斉藤・飯尾・島崎・竹中, 2012; 前場・竹中, 2011)。本研究では、近年重要視されている生涯スポーツの継続性について検討する。

角替(1995)は、公民館を利用したスポーツ学習における学習内容、学習数、学習方法・形態の時系列に伴う

推移確率を検討し、学習内容と学習方法・形態は大きく変化しないこと、集団スポーツは継続する傾向があるが、個人スポーツでは他領域の学習に移りやすいこと、女性は様々な領域に渡って学習を続ける傾向があることを報告した。

すなわち、高齢者のスポーツ活動への参加要因を考える場合、中高年期ばかりでなく、成人期前半からの継続性を検討する必要がある。また児童期や青年期の学校教育における部活動やサークル活動との関連を検討することも重要である。

人々がなぜスポーツをするのかという研究は、スポーツ参与「人々がスポーツにどのようなかわり合いをしているかということ」(景山・今村・佐伯, 1984)であるとして主にスポーツ社会学の領域で取り上げられてきた。参与には直接的な参与（スポーツへの参加）と間接的な参加（スポーツの観戦）とがあるが、本研究では前者の直接的参与に限定する。

スポーツへの関わりに関する研究動向を概観するため、野邊・梶房(2013)は、先行研究を、スポーツへの実施・非実施の規定要因、スポーツの継続要因、スポーツからの離脱に関する研究に分類・整理した。

金崎(1992)は、スポーツを通しての知人・友人関係を把握することによって、スポーツ・コミットメント（スポーツへの到達、執着、結びつき、あるいはスポーツ行動やスポーツ集団に身を投入すること）を測定した。コミットメントが高いほど、スポーツを重視し、実施する

傾向が高く、実施時間が長く、出費が多い傾向を報告した。また競技会出場型に属するものが多いことも認められた。

スポーツ活動を継続する要因について、金崎・徳永・藤島・岡部・橋本(1989)は、婦人テニス教室への参加者を対象にテニスの継続要因として、時間的余裕、テニスコートの利用可能性、仲間の存在、経済的負担、スキルの向上、家族の存在、テニスの行動意図、ポジティブなスポーツ意識を挙げている。しかし、生涯学習としてのテニスへの参与に関わる要因が成人期前半から中高年期を通してどのように変化するのか不明である。

本研究では、生涯学習としてのテニスへの参与に関わる要因を成人前期から高齢期にかけてどのように変化するかを横断的調査によって検討する。具体的には、テニスを始めたきっかけ、サークル経験、テニススクール経験、テニスの継続状況、テニス継続理由について、質問紙調査を通して年代間の比較を行うことを目的とする。

方法

調査対象：東海地方のテニスを行った経験がある／あった、男性 133 名(平均年齢 53.7±13.01 歳)、女性 148 名(平均年齢 51.1±10.32 歳)の計 281 名の協力を得た。各変数間の関連については、協力者のうちテニスを継続している 241 名の回答を分析した。

倫理的配慮：質問紙の表紙に、調査の趣旨、調査への協力は自由意志に基づくこと、結果は統計的に処理され個人情報には厳重に保護されることを明記し、質問紙への回答をもって同意とみなした。

調査手続き：2015 年 5 月に岐阜県において行なわれたテニスイベントへの参加者、公営施設でテニスに参加している成人、および G 商業高校と T 大学のテニス部 OB を対象に調査を行なった。調査の趣旨を説明した後、質問紙を手渡しその場で回答してもらい回収した。

調査内容：質問紙は以下の内容を含んでいた。

- ①基本的属性：性別、年齢、現在の家族構成、現在の職業
- ②テニス経験：テニス経験年数、開始年齢、中止年齢、開始のきっかけ、サークル経験、スクール経験
- ③テニスの継続状況：「友人とプレーしている」「テニススクールに入っている」など 6 項目に「はい」「いいえ」の 2 件法、テニス活動の頻度に 4 件法、試合への参加に 3 件法で回答を求めた。
- ④テニス継続理由：テニスの継続理由について著者 2 名が項目を出し合い、KJ 法によりテニスの開始・継続に関わる質問項目を分類し、「娯楽性」、「仲間関係」、「健

康促進」、「環境要因」の 25 項目からなる質問紙を作成した。「あてはまらない」1 点から「あてはまる」5 点の 5 件法で回答を求めた。

⑤テニス中止理由：④のテニス継続理由に対応する中止理由 27 項目について 5 件法で回答を求めた。

結果

1. 対象者の基本特性

テニス継続者は 241 名(男性 112 名、女性 129 名)、中止者 42 名(男性 21 名、女性 21 名)であった。

家族構成(同居)は、単身 23 名、配偶者 240 名、子ども無し 123 名、1 人 65 名、2 人 69 名、3 名以上 26 名、父 31 名、母 58 名、その他 9 名であった。

職業は、フルタイム 130 名、パートタイム 70 名、無職 77 名、無回答 5 名であった。

年代別の比較を行なうために、40 歳未満群 34 名(男性 18 名、女性 16 名)、40～59 歳群 166 名(男性 67 名、女性 99 名)、60 歳以上群 81 名(男性 48 名、女性 33 名)の 3 つの年齢群を構成した。

テニス継続・中止の人数と % を年齢群別に表 1 に示す。 χ^2 検定を行なったところ、40 歳未満群では「継続」が少なく「中止」が多いこと、60 歳以上群では逆に「継続」が多く「中止」は少ないことが認められた。

表 1 年齢群別のテニス継続・中止人数 (%)

項目	全体	40 歳 未満群	40～59 歳群	60 歳 以上群	χ^2
継続	241 (85.2)	23 (67.6)	139 (83.7)	77 (95.1)	14.712
中止	42 (14.8)	11 (32.4)	27 (16.3)	4 (4.9)	$p<.01$

2. テニス関連の経験要因

テニスを始めたきっかけを表 2 に示す。全体的には、「友人がやっていた」66 名、「友人のすすめ」48 名、「親がやっていた」28 名、「プロのプレーヤーの影響」15 名、「部活に参加した」14 名、「テレビ番組をみて」14 名、「兄弟がやっていた」7 名という理由であった。

年齢群間を χ^2 検定で検討したところ、40 歳未満群では「親がやっていた」が多いこと、40～59 歳群では「友人のすすめ」が少ないこと、60 歳以上では「友人のすすめ」が多く「親がやっていた」が少ないことが認められた。

サークル経験は(表 3)、高校 126 名、大学 61 名、中学校 60 名、社会人 33 名、小学校 4 名、経験無し 92 名、その他 3 名であった。年齢群を比較すると、40 歳未満

表2 テニスを始めたきっかけ度数 (%)

項目	全体	40歳未満群	40～59歳群	60歳以上群	χ^2
親がやっていた	28 (12.2)	12 (40.0)	16 (11.5)	0 (0)	42.61
親のすすめ	8 (3.5)	1 (3.3)	6 (4.3)	1 (1.7)	
友人がやっていた	66 (28.8)	3 (10.0)	41 (29.5)	22 (37.3)	
友人のすすめ	48 (21.0)	4 (13.3)	23 (16.5)	21 (35.6)	
先生のすすめ	4 (1.7)	1 (3.3)	2 (1.4)	1 (1.7)	-
テレビやアニメを見て	14 (6.1)	2 (6.7)	10 (7.2)	1 (1.7)	
プロプレーヤーを見て	15 (6.6)	2 (6.7)	10 (7.2)	3 (5.1)	
兄弟の影響	7 (3.1)	0 (0)	6 (4.3)	1 (1.7)	
部活	14 (6.1)	2 (6.7)	8 (5.8)	4 (6.8)	-
その他	24 (10.5)	2 (6.7)	17 (12.2)	5 (8.5)	

—は分析から除外

表3 年齢群別のサークル経験人数 (%)

項目	全体	40歳未満群	40～59歳群	60歳以上群	χ^2
小学校	4 (1.4)	2 (5.9)	1 (.6)	1 (1.3)	48.108
中学校	60 (21.1)	12 (35.3)	36 (21.8)	12 (15.0)	
高校	126 (44.4)	26 (76.5)	83 (50.3)	17 (22.1)	
大学	61 (21.5)	15 (44.1)	40 (24.2)	6 (7.8)	
社会人	33 (11.6)	3 (8.4)	18 (10.9)	12 (15.6)	-
無し	92 (32.4)	2 (5.9)	49 (29.7)	40 (51.9)	
その他	3 (1.1)	0 (0)	1 (.6)	2 (2.5)	

群は「大学」が多く「経験無し」が少ないこと、60歳以上群は「経験無し」が多く「高校」「大学」が少ないことが認められた。

テニススクール経験は(表4)、小学校11名、中学

表4 年齢群別のスクール経験人数 (%)

項目	全体	40歳未満群	40～59歳群	60歳以上群	χ^2
小学校	11 (3.9)	5 (15.2)	6 (3.7)	0 (0)	41.859
中学校	17 (6.0)	6 (18.2)	10 (6.2)	0 (0)	
高校	28 (9.9)	11 (33.3)	15 (9.3)	2 (2.6)	
大学	5 (1.8)	0 (0)	4 (2.5)	1 (1.3)	
社会人	121 (42.6)	8 (24.2)	78 (48.4)	37 (44.2)	-
無し	117 (41.2)	15 (44.1)	64 (39.8)	34 (48.1)	
その他	4 (1.4)	0 (0)	2 (1.7)	2 (2.6)	

表5 年齢群別のテニス継続状況度数 (%)

項目	全体	40歳未満群	40～59歳群	60歳以上群	χ^2
友人とプレー	219 (77.1)	23 (88.5)	123 (89.1)	70 (93.3)	11.341
スクール	88 (31.0)	8 (30.8)	55 (40.1)	23 (28.4)	
サークル	26 (9.2)	5 (19.2)	12 (9.0)	8 (10.8)	
テニスクラブ	106 (37.3)	9 (34.6)	61 (45.2)	35 (47.3)	
家族とプレー	77 (27.1)	12 (46.2)	40 (29.4)	23 (31.1)	n.s.
仕事として	22 (7.7)	6 (32.1)	11 (8.2)	5 (6.8)	

校17名、高校28名、大学3名、社会人121名、経験無し117名であった。年齢群の比較から、40歳未満群では「小学校」「中学校」「高校」で体験が多く「社会人」で少ないこと、60歳以上群では「小学校」「中学校」「高校」の体験が少ない。

3. テニスの継続状況

次に、どのような形態でテニスを継続しているか検討した。表5に示すように、友人とプレーする人が多く(219名)、テニスクラブ(106名)やテニススクール(88名)、家族とプレーする人も多い(77名)。検定の結果からは有意な年齢による偏りはみられなかった。

表6 年齢群別のテニス実施状況 (%)

項目	全体	40歳未満群	40～59歳群	60歳以上群	χ^2
月1～2回	34 (12.0)	7 (26.9)	21 (15.2)	6 (7.9)	15.287
週1～2回	118 (41.5)	13 (50.0)	67 (48.6)	35 (46.1)	
週3～4回	73 (25.7)	3 (11.5)	45 (32.6)	25 (32.9)	
ほぼ毎日	18 (6.3)	3 (11.5)	5 (3.6)	10 (13.2)	$p<.05$

表7 年齢群別の試合出場状況 (%)

項目	全体	40歳未満群	40～59歳群	60歳以上群	χ^2
出ていない	108 (38.0)	8 (30.8)	52 (37.7)	47 (62.7)	14.928
草大会出場	60 (21.1)	7 (26.9)	39 (28.3)	13 (17.3)	$p<.01$
公式戦出場	74 (26.1)	1 (2.3)	47 (34.1)	15 (20.0)	

表8 テニス継続質問項目の因子分析の結果

質問項目	因子				
	1	2	3	4	5
第1因子 楽しみ ($\alpha=.841$)					
継続6 上達するのがうれしいから	.983	.048	-.295	.062	.122
継続18 うまくなりたいから	.937	-.026	-.181	.079	.135
継続7 健康のため	.549	.241	.089	-.029	-.280
継続22 ストレス解消になるから	.505	.121	.231	.024	-.202
継続23 爽快感があるから	.472	.056	.238	.126	-.175
継続10 ゲームを楽しみたいから	.470	.271	.183	-.168	.061
継続16 勝負をすることが楽しいから	.463	-.317	.265	-.032	.287
継続14 試合で勝ちたいから	.454	-.051	.337	-.135	.387
継続2 頭を使うから	.404	-.075	.259	.055	-.151
第2因子 余暇 ($\alpha=.698$)					
継続8 友人に誘われたから	-.202	.741	-.013	.031	.287
継続9 手軽にできるから	.289	.661	-.067	-.134	.006
継続5 暇つぶしになるから	.090	.646	-.049	.052	.130
継続11 ダイエットするため	-.058	.494	.273	.071	.009
継続4 近くにテニスコートがあるから	.137	.394	-.065	.049	.092
第3因子 社交 ($\alpha=.635$)					
継続13 年をとってもできるから	.010	-.090	.729	-.037	.070
継続12 昔からの仲間がやっているから	-.305	.184	.618	.035	.157
継続19 汗をかくため	.207	.034	.484	.005	-.045
継続3 仲間ができるから	.062	.105	.449	.041	-.025
継続20 他人に教えることが楽しいから	.035	-.169	.397	.107	.169
第4因子 異性友人 ($\alpha=.841$)					
継続24 クラブ・サークルに素敵な人がいるから	.151	.040	-.070	.865	.059
継続25 気になる(素敵な)ひとがいるから	.001	.004	.148	.822	.002
第5因子 家族 ($\alpha=.668$)					
継続15 子どもとプレーをしたいから	.023	.233	.035	.055	.744
継続17 家族がやっているから	-.060	.247	.107	.008	.449

週にどのくらいテニスを行なうかみたところ（表6）、週1-2回が40%、週3-4回も20%を超えた。年齢群間で比較してみると、40歳未満は「月1-2回」が多く「週3-4回」は少ない、40-59歳群は「ほぼ毎日」が少ない、逆に60歳以上は「ほぼ毎日」が多いことが認められた。試合に出場する程度についてみると（表7）、公式戦出場は74名、草大会出場も60名であり過半数を超えていた。年齢群別に見ると、40-59歳群は「出場しない」が少なく、60歳以上は逆に「出場しない」が多く「公式戦」が少なかった。

4. テニス継続性質問項目の因子分析

テニス継続に関わる質問25項目について、主因子法・プロマックス回転により因子分析を行なった。スクリープロットの減衰状況や解釈可能性を検討し、さらにいずれの因子にも負荷量の低かった2項目を削除し分析を繰り返した結果、次の5因子解を採用した（因子負荷量、40以上、累積寄与率50.35%、表8）。

第1因子は、「上達するのがうれしいから」、「うまくなりたいから」、「健康のため」、「ストレス解消になるから」などスポーツを行なうことに伴う楽しみを示してお

り「楽しみ」因子とした。

第2因子は、「友人に誘われたから」、「手軽にできるから」、「暇つぶしになるから」といった余暇活動としてのテニスを示しており「余暇」因子とした。

第3因子は、「昔からの仲間がやっているから」、「仲間ができるから」などの項目に負荷が高く、「社交」因子とした。

第4因子は、「クラブに素敵なひとがいるから」と「気になるひとがいるから」の2項目からなり「異性友人」因子とした。

第5因子は、「子どもとプレーをしたいから」と「家族がやっているから」からなり、「家族」因子とした。

各因子についてクロンバックの α 係数を算出したところ、第1因子.841、第2因子.698、第3因子.635、第4因子.841、第5因子.668となり、ある程度の信頼性が確認された。以上の各因子の合計得点を算出し因子得点とした。

表10 年齢属性とテニス継続因子の年齢群間比較

変数	年齢群	度数	平均	SD	F値
経験年数	40歳未満	34	12.1	6.20	32.751
	40～59歳	166	18.5	10.48	a<b<c
	60歳以上	79	27.6	11.51	
開始年齢	40歳未満	34	14.8	6.22	39.768
	40～59歳	165	22.4	10.90	a<b<c
	60歳以上	80	33.1	13.07	
中止年齢	40歳未満	11	22.5	6.14	7.178
	40～59歳	27	29.0	10.02	a、b<c
	60歳以上	4	45.8	20.85	
テニス継続因子					
楽しみ	40歳未満	26	35.1	6.43	n.s.
	40～59歳	133	35.5	6.47	
	60歳以上	69	35.3	5.51	
余暇	40歳未満	26	16.4	4.88	n.s.
	40～59歳	133	16.9	4.47	
	60歳以上	74	16.6	4.32	
社交	40歳未満	26	17.9	4.18	n.s.
	40～59歳	132	18.1	3.68	
	60歳以上	74	18.8	2.85	
異性友人	40歳未満	26	4.7	2.73	n.s.
	40～59歳	136	4.6	2.48	
	60歳以上	74	3.9	2.13	
家族	40歳未満	26	6.0	2.21	6.638
	40～59歳	137	5.2	2.53	a、b>c
	60歳以上	74	4.2	2.37	

a 40歳未満 b 40～59歳未満 c 60歳以上

表9 年齢属性とテニス継続因子の性別統計量

	性別	N	平均値	SD	t値
年齢	男性	133	53.2	10.72	n.s.
	女性	148	47.0	9.32	
経験年数	男性	132	23.4	12.92	4.430
	女性	148	17.4	9.28	***
開始年齢	男性	133	23.7	12.86	n.s.
	女性	148	25.3	12.34	
中止年齢	男性	21	27.1	9.82	n.s.
	女性	21	30.7	13.80	
テニス継続因子					
楽しみ	男性	106	35.4	5.91	n.s.
	女性	124	35.4	6.41	
余暇	男性	104	16.4	3.72	n.s.
	女性	125	16.7	4.78	
社交	男性	110	18.5	3.28	n.s.
	女性	124	18.1	3.75	
異性友人	男性	111	4.3	2.46	n.s.
	女性	127	4.4	2.40	
家族	男性	112	4.9	2.33	n.s.
	女性	127	5.0	2.67	

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

5. 各変数の記述統計と性差及び年代差

各変数の記述統計を表9に示す。テニスの経験年数には性差がみとめられ、男性のほうが女性よりも長い。これは、テニスの開始年齢には差がないことから、女性よりも男性のほうが年齢層の高いことを反映している。その他の変数には性差は認められなかった。

対象者を40歳未満群(34名)、40～59歳群(166名)、60歳以上群(81名)の3つの年齢群に分類した。各変数について、1要因分散分析を行い有意な効果が見られた場合には、LSD法によって多重比較を行なった。その結果(表10)、経験年数が有意であり、40歳未満群<40～59歳群<60歳以上群の順に経験年数が長かった。

次に、開始年齢について年齢群の効果が有意で、40歳未満群<40～59歳群<60歳以上群となった。さらに、中止年齢に有意な群間差が見られ、60歳以上群が高い得点を示した。若い年代のほうが高齢者よりも若年からテニスを開始し、中止年齢も若いことになる。

テニス継続要因については、「家族」因子が有意であり、60歳以上群が低い得点を示した。その他の因子には年齢群間に差が認められなかった。

6. 変数間の相関係数と重回帰分析

各変数間の相関係数を算出したところ(表11)、年齢と経験年数、開始年齢、中止年齢の間、経験年数と中止年齢、「社交」の間、開始年齢と中止年齢に中程度の正の相関が認められた。また、「楽しみ」、「余暇」、「社交」、「異性友人」、「家族」のテニス継続因子間に中程度の正の相関が認められた。一方、年齢と「家族」、経験年数と「異性友人」、開始年齢と「社交」、「家族」の間には弱い負の相関が認められた。

経験年数をテニスの継続性とみなして従属変数とし、テニス継続5因子を独立変数とした重回帰分析を行なっ

表12 テニス継続年数を従属変数とした重回帰分析の結果(β)

テニス継続因子	全体	40歳未満群	40～59歳群	60歳以上群
楽しみ				
余暇	-0.272		-0.34	
社交	0.403	0.492	0.313	0.391
異性友人	-0.197	-0.612		
家族				
R^2	0.170	0.561	0.120	0.275

た。その結果(表12)、重決定係数が有意であり($R^2=.170$)、「社交」が有意な促進的効果($\beta=.403$)、「余暇」($\beta=-.272$)と「異性友人」($\beta=-.197$)が負の影響を示した。

各変数において年齢群間に差が見られたことから、40歳未満群、60歳以上群の人数が多変量解析としてはやや少ないのではあるが、各年代群別に同様の重回帰分析を行った。

その結果、40歳未満群においては($R^2=.561$)、「社交」($\beta=.492$)と「異性友人」($\beta=-.612$)が有意な関連を示し、40歳～59歳群では($R^2=.120$)、「余暇」($\beta=-.340$)と「社交」($\beta=.313$)が有意であった。60歳以上群では($R^2=.275$)、「社交」(.391)のみが正の影響を示した。以上のように年齢群間でテニス継続に関わる要因は異なることが示唆された。

表11 年齢属性とテニス継続因子間の相関係数($N=222\sim 281$ 、中止年齢のみ $N=41$)

	年齢	経験年数	開始年齢	楽しみ	余暇	社交	異性友人
経験年数	0.485***						
開始年齢	0.582***	-.117					
中止年齢	0.606***	0.536***	0.486***				
楽しみ	-.029	.121	-.081				
余暇	-.048	-.107	.032	0.430***			
社交	.066	0.253***	-0.138*	0.566***	0.488***		
異性友人	-.079	-0.154*	.033	0.287***	0.256***	0.273***	
家族	-0.254***	-.021	-0.241***	0.248***	0.382***	0.327***	0.198**

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

考察

1. テニスの開始・継続・中止の世代間比較

本研究の目的は、生涯学習としてのテニスへの参与に関わる要因を成人前期から高齢期にかけてどのように変化するかを横断的調査によって検討することであった。テニス継続・中止について年齢群間で比較したところ、40歳未満群では中止が比較的多いこと、60歳以上群では逆にテニスを継続する者が多い傾向が認められた。高齢者において、テニスを中止した経験を持つ対象者を調査することが困難であったことを反映していると思われる。

テニスを開始したきっかけでは、40歳未満群では親がテニスをやっていた影響が大きく、60歳以上では友人のすすめによる場合が多い。また、40歳未満群は大学でサークル活動を行っていた者が多く、逆に60歳以上群はそれまでテニスを行った経験がない者が多い。すなわち、若年層は、大学での活動の延長線上でテニスへ参与していること、高齢者層は余暇活動としてテニスへ参与していることが示唆された。

これは、テニスクールへの参加にも反映されており、40歳未満群では小・中・高校での体験が多く、60歳以上群では学校時代の体験が少ない。学校時代の影響は若年層において強いことが示されたが、金崎(2000a)が報告した、社会人のスポーツ・コミットメントの形成において学校体育の諸要因が関連しているという結果と一致する。

次に、テニスを行っている状況や形態について検討する。全体として、友人とプレーする者が大半であり、テニスクラブやテニスクール、家族とプレーする者も多い。全体として週末にテニスを行なう者が多いが、40歳未満は月1-2回程度が多く、逆に60歳以上はほぼ毎日行なっている者も多い。以上より、高齢者は余暇活動としてのテニスをかなり頻繁に行なっているといえる。競技会への出場者は、県大会など公式戦出場と草大会出場を合わせると過半数を超えた。しかし世代間で比較すると、40-59歳群は出場者が多く、60歳以上は逆に出場しない者が多かった。

霜島・木村(2013)は、テニス参加者の参加動機、継続意図、参加頻度に及ぼすテニス競技会への参加の影響を検討し、参加動機が高まることを報告した。若年層や中年期のテニス愛好者にとっては競技会への参加は動機づけを高めるものの、高齢者は、競技性の低い余暇活動としてテニスを楽しんでいることが示唆された。

ここで、年齢属性について言及したい。年齢群間でテニスの経験年数を比較したところ、当然のことながら、高齢になるほど経験年数が長かった。また性差がみとめ

られ、男性のほうが女性よりも長い。これは、テニスの開始年齢には差がないことから、女性よりも男性のほうが年齢層の高いことを反映している

開始年齢についても年齢群間に差がみられ、高齢者ほど年齢が高かった。中止年齢も、60歳以上群が高く、若い年代のほうが高齢者よりも若年からテニスを開始し、中止年齢も若いことを示している。

2. テニス継続要因の影響

テニス継続理由の質問項目について因子分析を行ない、「楽しみ」、「余暇」、「社交」、「異性友人」、「家族」の5因子が抽出された。

年齢群間で各因子得点を比較したところ、「家族」因子のみが有意であり、60歳以上群が低い得点を示した。高齢者は家族と共にテニスに参与しない傾向が示唆された。さらに、経験年数を従属変数とした重回帰分析の結果から、全体としては、「社交」に有意な促進的効果、「余暇」と「異性友人」に負の影響が認められた。

テニスを継続する要因としては仲間の存在が重要であり、手軽におこなう余暇活動としてのテニスや異性友人を誘引としたテニス参加は長続きしないことが示唆された。これは、スポーツ・コミットメントを友人関係の側面から尺度化した金崎(1992)の研究やスポーツ・コミットメントの形成において重要な他者の存在を指摘した金崎・橋本(1995)の報告と一致する。

さらに、年齢群別に分析を行なったところ、40歳未満群においては、「社交」が正の「異性友人」が負の有意な関連を示し、40歳～59歳群では、「余暇」が負の「社交」が正の関連を示した。一方、60歳以上群では、「社交」のみが正の影響を示した。

以上のように各世代共通して、友人と共にテニスをすることがテニスへの参加を活性化するが、若年層では異性友人の要因が逆にテニス継続性を阻害すること、中年層では競技性の低い余暇活動としてのテニス参与が阻害的要因になることが示唆された。

3. 今後の課題と展望

最後に、本研究における課題と今後の展望を述べたい。まず、サンプリングの問題がある。著者らは長年テニスに関わっており、今回の調査は種々の機会を通してテニス参加者に調査を依頼した。若年層の調査対象が少ないなどサンプリングの偏りがあると思われる。

また、テニス中止・非継続者は回答者が少なかったため分析を行わなかった。スポーツからの離脱について、野邊・梶房(2013)は先行研究を展望し、競技者のパー

ンアウトを取り上げているが、テニス中止・非継続については今後検討すべき課題である。非継続の規定因を探るためには、例えば運動部のOB会などを通して離脱原因の調査を行なうことが考えられよう。

第二に、本研究においては、テニス継続性に関わる要因の性差については明示しなかった。運動への志向性や結婚、出産、子育て等の要因がテニス継続性に強く関与するとも考えられる。北田(2003)は、女子短期大学卒業生を対象に運動の継続や中断のパターンを類型化し、セルフ・エフィカシーが運動継続に寄与することを報告した。さらに林・湊(1996)は、家庭婦人のバレーボールの参加者を対象に調査を実施し、また小坂井・永川(2015)も、在宅高齢者の女性を対象とした半構造化面接によって、生涯を通して運動継続の要因を考察している。

第三に理論的な問題がある。スポーツ社会学においては、スポーツ参与を社会化過程とみなし、社会学的理論からアプローチしている。安・藤原(1996)によると、スポーツ的社会化研究は「スポーツへの社会化」に焦点が当てられてきた。スポーツへの参与において、生活行動における財の使用行動としてスポーツ消費行動という特徴を取り上げ、関連要因を分析することが必要と主張している。今後はこうした視点からのアプローチも生涯スポーツの継続性の検討には有効と考えられる。

引用文献

- 安 昌圭・藤原健固 1996 スポーツ消費行動研究の社会学的視座 スポーツ社会学研究, 4, 63-78.
- Elavsky, S., McAuley, E., Motl, R. W., Konopack, J. F., Marquez, D. X., Hu, L., Jerome, G. J., & Diener, E. 2005 Physical activity enhances long-term quality of life in older adults: Efficacy, esteem, and affective influences. *Annals of Behavioral Medicine*, 30, 138-145.
- Guinn, B. 1999 Leisure behavior motivation and the life satisfaction of retired persons. *Act Adapt Aging*, 23, 13-20.
- 林 喜美子・湊 久美子 1994 家庭婦人が生涯スポーツ活動に長年に渡って参加できる要因 和洋女子大学紀要家政編, 34, 61-78.
- 石澤伸弘 2004 後期高齢者の生活満足度に影響を及ぼす運動・スポーツ活動と日常生活動作(ADL)のケーススタディ 体育学研究, 49, 305-319.
- 石澤伸弘・上田知行・本多理紗 2010 高齢者の運動実践が日常生活に及ぼす影響の分析—訓子府町末広地区調査の結果から— 北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報, 創刊号, 9-16.
- 景山 健・今村浩明・佐伯聰夫 1984 スポーツ参与の社会学について 体育社会学研究, 6, 1-21.
- 金崎良三 1992 スポーツ・コミットメントの形成とスポーツ参与に関する研究(1)—スポーツにおける友人関係によるコミットメント尺度作成の試み— 健康科学, 14, 35-42.

- 金崎良三 2000a 社会人のスポーツ・コミットメントに及ぼす学校体育の影響 佐賀大学文化教育学部研究論文集, 4, 151-166.
- 金崎良三・橋本公雄 1995 青少年のスポーツ・コミットメントの形成とスポーツ行動の継続化に関する研究: 中学生・高校生を対象に 体育学研究, 39, 363-376.
- 金崎良三・徳永幹雄・藤島和孝・岡部弘道・橋本公雄 1989 スポーツ行動の継続化とその要因に関する研究(1)—婦人テニス教室参加者の場合— 健康科学, 11, 71-85.
- 北田豊治 2004 女子短期大学卒業生における運動参加パターンに関する研究 九州女子大学紀要, 40, 13-23.
- 小坂井留美・永川ひとみ 2015 高齢期までの運動継続とQOLとの関連—北海道の高齢女性の語りから— 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 6, 1-12.
- 前場康介・齊藤めぐみ・飯尾美沙・島崎崇史・竹中晃二 2012 高齢者の運動実践と健康関連QOLとの関連に果たすセルフ・エフィカシーの役割 健康心理学研究, 25, 60-66.
- 前場康介・竹中晃二 2011 高齢者を対象とした運動介入研究におけるセルフ・エフィカシーの意義 健康心理学研究, 24, 67-81.
- 野邊政雄・梶房 出 2013 スポーツへの関わりに関する研究動向, 153, 109-113.
- 岡本祐子 2004 生活の質と精神的充足感から見た生涯学習ニーズ—成人期の「アイデンティティ探求」ニーズの分析— 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 53, 175-183.
- 太田貞夫・仲野隆士・丸山富雄 2005 高齢者のQOLに及ぼす継続的なスポーツ実践の影響に関する研究—仙台市の高齢者の事例— 仙台大学大学院スポーツ科学研究科論文集, 6, 17-24.
- 霜島広樹・木村和彦 2013 テニス競技会への参加がテニス参加者に与える影響—参加動機・継続意図・参加頻度の観点から— スポーツ産業学研究, 23, 89-99.
- 角替由弥子 1995 スポーツ学習における学習継続性の研究 東海女子大学紀要, 15, 261-274.
- 山口泰雄・土肥 隆・高見 彰 1996 スポーツ・余暇活動とクオリティ・オブ・ライフ—中高年齢者の世代間比較— スポーツ社会学研究, 4, 35-50.

謝辞

本論文の作成に当たり、貴重なテニスの時間を割いて調査に協力して頂いたテニス愛好者の皆様、及び丁寧なコメントを頂いた査読者に感謝いたします。

Comparison on Commitment to Tennis as Lifelong Learning among Young, Middle and Elderly Peoples

MIYAMOTO, Kunio, ISOBE, Kazumasa

Abstract

The purpose of this study was to compare the commitment to tennis as lifelong learning among young people, middle ages and the elderly people.

The younger ages were suggested to follow their activities of university or high school circles. The elderly people were active players of tennis, but not as active athletes.

The analysis of factors influencing commitment to tennis showed that playing tennis with friends is a positive factor among all ages. Further, it was suggested that friends of the opposite sex were negative factors in the younger ages and that tennis involvement as less competitive leisure activity had a negative influence on middle ages.

Keywords : tennis, lifelong learning, commitment to sport

— 2015.6.30 受稿、2015.9.27 受理 —